



TITLE:

京都外科集談会第373回例会

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会第373回例会. 日本外科宝函 1962, 31(1): 86-87

ISSUE DATE:

1962-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/204621>

RIGHT:

京都外科集談会第373回例会

昭和 36 年 2 月

- (1) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける整形外科機能訓練に就いて
(前腕骨々折の機能回復)

玉造整形外科病院

大塚 哲也

前腕骨々折患者36例に就いて一般統計と同時に機能回復を中心に追究した。副子固定期間は平均13日、ギブス28日、マッサージ、33日、訓練32日、入院69日である。肩、肘関節機能障害は一般に肘関節に近い骨折に発生、腕関節障害は訓練前には一応症例の大多数に発現する、前腕の回内、回外運動両者の障害は、前腕両骨々折に、又前者は尺骨々折、後者は橈骨々折に起る傾向が強い。但し、訓練を行う以前（昭和34年10月以前）と比較すると訓練による機能回復はいづれも良好である。以上の回復状況は勿論その他周囲径、握力、肢屈伸力、手指屈曲力等に就いても何れも数値で回復状況を示した。

- (2) 14才の少女に発生せる乳腺症の1例

大和高田市民病院外科

杉本 雄三、倉橋 道男

14才の少女。左乳房に鶏卵大、無痛性腫瘤を主訴として来院す。全身の所見および性器には特記すべき事はない。腫瘤は左乳房の下部にあり、弾性硬で圧痛なく、可動性である。表面の皮膚には異常所見なし。これを摘出する。腫瘤は被膜に覆われ剖面は一様に白色である。組織所見は一般に間質結合組織の増殖があり、一部には腺の著しい増殖がみられる。又他の部分では乳管の増生があり、又別の箇所には著しく拡大した乳管の内腔に向つて、乳管上皮細胞の乳芽状に増生している部分がみられる。これらの像が夫々独立したり、あるいは又混在してみられる。乳腫症の好発年齢は大体月経閉期およびその前後であり、藤森は60才以上および30才以下には発生しないといっている。本例は14才の少女に発生した乳腺症で、線維腺腫と考えられる面も多々あるが、組織像は乳腺症の像を呈しているので報告する。

- (3) 急性胃出血に関する23の考察

外科2 恒川 謙吾

高年者胃出血例、胃出血患者の術中搏停止例、噴門部新鮮潰瘍例、胃炎出血例、胃切除後胃炎出血例、胃切除後吻合部出血例の全6例について其の取扱い、及び病変の特異点を考察し報告した。

- (4) 胃癌穿孔例の検討

外I 山本 豊城、前谷 俊三

最近胃癌穿孔の2例を経験した。第1例は66才男子で、胃体下部、胃前壁小彎寄りに直径5mmの被覆穿孔があり、組織学的には腺癌で、穿孔後34時間目に胃全剝を行つた。

第2例は38才男子糖尿病患者で、胃体小彎上部に直径5mmの穿孔があり、汎発性腹膜炎を起していた。組織学的には単純癌で、穿孔後7時間で胃全剝を行つた。

2例共一応治療退院したが、強力な化学療法、輸血輸液及び麻酔の進歩等、主として患者の管理面における改善が手術の予後に好影響を及ぼしたと云う感を深めた。これと共に今後も胃癌穿孔に対しては、根治性は別としても胃切除の適応はますます拡大されるものと思われる。

- (5) 横行結腸に穿通した胃潰瘍の1例

大和高田市民病院外科

杉本雄三、鯉江久昭、原 慶文

53才男子。約6年前より胃潰瘍で内科的治療をうけていたが、嘔吐及び瀉腹を主訴として入院。諸検査の結果、良性幽門狭窄症の診断のもと開腹手術したところ、幽門部大彎側の潰瘍が横行結腸に穿通してこゝに胃横行結腸瘻を形成していることが判明した。胃潰瘍が結腸に穿通した報告例は、本邦において数例を上回らない。本症の特有症状は下痢、悪臭、嘔吐、急激な瀉腹であり、確実な診断はレ線検査によつて胃結腸瘻を証明することである。われわれの報告例は術前レ線検査で拡張された胃のために、造影剤が直接胃から結腸へ移行するのを見逃がし、比較的病歴の長い

胃潰瘍の場合、稀有な現象として本症の存することを念頭におき正確な読影力をもつて当つたなら、術前診断も可能であつたと思ひ、参考に供すべく報告する。

(6) 真性半陰陽の1例

(抄録未提出)

外Ⅱ 池田正尚

京都外科集談会第377回例会

昭和36年6月

(1) 脈絡叢乳嘴腫の3症例

外Ⅰ 辻 宏

脈絡叢の上皮より発生する Choroid Plexus Papilloma は、非常に稀な頭蓋内腫瘍である。

我々は京大第1外科に於て、過去30年間に Choroid Plexus Papilloma の3症例を経験しているが、これはその間の全頭蓋内腫瘍945例に対し、0.32%に相当している。

これらの症例は、全て20才代の男子で、しかも第IV脳室の Tela Chorioidea より発生したものであるが、何れも定型的な Choroid Plexus Papilloma の像を示し、悪性所見を示したものは見当らない。

第1例、第3例のように眼球振盪、運動失調症等の小脳乃至第IV脳室底の症状を示したものもあるが、第2例のように、はつきりした第IV脳室の症状を示さぬものもあり、全例共通して云える事は、何れも視力障害が強く表われている事で、特に発作的な black out が特徴的で、これ迄の報告例にある如き眩暈を来したものはない。

Wilkins等は、Plexus Papilloma ではしばしば髄液に Xanthochromia を来し、蛋白増加をみると云っているが、我々の症例では髄液に Xanthochromia 又は血液の認められたものはなかつた。

Plexus Papilloma で C.S.F. の Overproduction による Communicating hydrocephalus を来す事は Bucy, Kahn, Drucher, Matson, Ray & Peck, Sowonder 等により報告されており、第2例はその疑いが濃いが確認されていない。

第3例では固形腫瘍の他に、小脳虫部右部より右小脳半球に拡つた囊腫が認められた。

質問 安 藤

文獻上にみられる本疾患の治療成績如何。

答

Plexus Papilloma の治療成績について。

第IV脳室より発生した Choroid Plexus Papilloma の予後は悪く、我々の症例では生存例はない。

Wilkins 等は無理に外科的侵襲を加える事を避け、X線療法又は部分切除とX線療法を併用する事を推奨している。Kahn 等はX線療法に疑問を持つていようである。Kahn, Wilkins 等の症例をみれば側脳室から発生したものの予後は比較的良好なようである。

(2) Paget 氏病の1例

(抄録未提出)

外Ⅱ 三木成仁、大室耕一

(3) 教室における肺癌53例

外Ⅱ 長瀬正夫

昭和26年以降、本年4月迄に我々が取扱つた原発性肺癌53例について一括報告した。

肺癌もまた、他臓器の癌と同様、早期診断、早期手術が診療の根本原則であることは言う迄もなく、その重要性が諸家によつてくり返し強調されて来たが、我々の症例からみた限りにおいては、早期症例が増加するような傾向は全くみられず、逆に、入院時既に手術不能又はそれに近い状態のものが却つて増加する傾向にある。Overholtのいう無症状期に健康診断で胸部レ線像に異常陰影を発見された症例が11例あるが、そのうち、積極的に肺癌との鑑別を志したものは、我々の1例のみであつて、他の10例は全て結核療法を受けるか、又は経過を観察していたというにすぎず、異常陰影発見から入院迄の平均経過期間は9.8ヵ月であつて、全症例の平均7.2ヵ月よりも2ヵ月半も長いのである。又誤つて結核として治療された者は31年以前では21例中7例であつたのに対して、32年以降では32例中14例と却つて増加する傾向にある。肺癌の治療率がいつこうに向上して来ない原因の少くとも一部はこのような事情に求めるべきであらう。